北京へ毛猴を求めて

相坂　耕作

筆者は子供の頃から昆虫に興味を持ち、趣味として長年虫と付き合っている。昆虫そのものはもちろんだが、それと共に昆虫に関する民俗資料等にも興味を持ち収集保存、研究テーマの一つとしている。筆者が若いころ愛読していた本の中に安松京三著「昆虫物語」という本があり、その中のグラビアに昔、中国(中華民国の時代)に「蝉殻人形」という民間玩具があったことを知った。それから後、中国の書物や文献等によると現在も中国の民間工芸として細々と作成されていることが分かった。平成元年(1989)、初めて中国大陸を訪問する機会があり、「蝉殻人形」に出会えるかもしれないと心弾み、香港と広州・桂林の多くの土産物屋を物色したが、残念ながら探し出すことはできなかった。それから数年後、３度続けて中国最大の都市上海へ旅行した。しかし、そこでも入手出来なかった。何とか筆者の私設資料館「播磨昆虫民俗資料館」に資料として収蔵したく参考資料等を見ていると「中国博物館めぐり」という本が目についた。早速読んだところ、蝉殻人形が「毛猴」(ﾏｵﾌｫ)として紹介してあり製作者も載っている。いつか北京へ「毛猴」を求めるべく訪問する機会を待っていた。平成８年10月、中華民国台湾省台北動物園胡蝶館に勤務されている筆者の台湾の友人が筆者宅に泊まられ各地を観光されたおり、中国の古玩具展が筆者の居住地に近い日本玩具博物館で行われており、よい機会と案内した。その時以前から筆者と知り合いの女性学芸員、尾崎織女さんより中国の民間玩具の「毛猴」を見る機会を得た。中華民国台湾省の友人も全く「毛猴」については知らなかった。ところで話を聞くところによると同年、同館の館長さんが北京にて入手されたという。そんな事からヒントをもらい、今回「毛猴」を入手し"心想事成"ことが出来た初の北京行、その紀行文を駄文ではあるが書いてみた。

第１日目(1997. Ⅱ. 08)

大変忙しかった仕事から離れ、１月中旬急いで中国北京に旅立つ手続きをとった。本年で学生生活と別れ、一般社会人となるため、海外旅行などの機会が少なくなる息子との旅立ちである。

早朝６時の新幹線に乗車するため娘を早く起こし姫路駅まで自家用車で送ってもらい、関西空港での集合時間８時20分ころに到着、11時15分機上の人となり北京空港に現地時間の２時頃についた。中国の首都なので、もっと大きな空港かと思っていたが案外小さく、上海の虹橋空港のほうが大きく感じた。宿泊ホテルの新橋飯店へ着いたのは３時頃だっただろうか。ホテルには同じツアーの２人組の若い女性２カップルと一緒だった。

諸手続きを済ませた後、タクシーで「魚虫市場」へ行くことにした。現地ガイドより「魚虫市場」があるという西直門の場所等を聞き、現地へ行ったのだが、あるのは熱帯魚や金魚またそれらのグッズばかりで虫に関するものは全くなかった(写真１)。どうやら夏季以後に販売するようになるらしい。仕方がないので「魚虫市場」付近でタクシーを拾い早速グッズ物を求めるため北京友誼商店へ行った。そこではトンボ凧等を購入し、ホテルへ戻り明日の作戦を練ることにした。ホテルにあるＪＴＢデスクで「毛猴」の製作者曹儀簡(サオイチェン)宅へ連絡をとってもらうことにした。よいことにＪＴＢデスクを担当している女性は現地の方だったので地理に大変詳しく助かった。筆者は在北京中にいつでも曹氏の都合のよい日に訪問させて戴く旨を申し出たところ、ＪＴＢデスクの女性は早速明日９時にお越し下さいとの先方の返事であることを筆者に伝えて下さった。明日は日本でいうお正月。中国では春節の元旦である。訪問するのも申し訳なく思ったが、２度とないチャンスなので厚かましくもお邪魔させていただくことにした。その夜は、上海ほど地理も分からないのでホテル内のレストランにて夕食をとることにした。普通の北京料理だったので何とか食べること

ができたが、あまりにも多く注文しすぎたもので、かなりの料理を残す羽目になってしまった。本日は日本でいう大晦日、レストランではくじ引きのようなものをやっていて、スリットの入ったチャイナ服の小姐が、筆者のテーブルへもやってきて、箱の中のくじを引けといっている仕草をしているので引いてみた。何も景品は出なかったが、明日からの力がつく、いい言葉がプレゼントされた。そのくじの紙には「心想事成」とある。明日は昔から思いを寄せていた「毛猴」こと蝉殻人形とその製作者のお目にかかれると。

第２日目(1997. Ⅱ.09)

今日の楽しみが頭に入っているのか朝早くから目覚め、朝食のバイキングを平らげた。そしてホテル待機のタクシーに乗車し曹氏宅へ向かっていった。しかし、目的地の大きな通りで降ろされてしまった。おそらくこの付近であるとタクシーの運転手はいっているのだろうが、全く言葉は分からない。降ろされた後が大変であった。筆者の新しい靴が靴ずれを起こしだしたのである。しまったと思ったが後のまつりである。たまたま新しい靴を子供にプレゼントしてもらったので履き試しをしたのだった。目的地付近で歩いてばかり、足が痛くてたまらなかった。中国の首都北京と云えども、観光地以外ではほとんど日本語は通じない。結局30分以上歩いて道行く人に住所を示して聞きまわったが、反応はいろいろで目的地には到着しない。時間もずんずん過ぎていくので、もう一度タクシーに乗り直し名の書いたメモを渡し乗車、降ろされたところは最初のタクシーの降りた側であった。もっと近くで聞いておけばよかったのにと後から悔やまれた。おおまかに曹氏宅のあるとおもわれる番地に近付いてきたが、曹氏宅は見付からない。そこで牛乳配達らしき男性が大声で、おそらく「牛乳」と声掛けているのかと思うが、その人に聞いてみることにした。すると曹氏宅へも配達しているのか、番地と名前がメモに載っていた、やっと目的地にたどり着いたかとおもったら、すでに約束時間の９時が１時間も遅刻し、10時近くなっていた。遅くなってしまったが曹氏は快く出迎えて下さった。曹氏が「毛猴」の名人であることは「中華人民共和国博物館ガイド」によりよく存じていた。その曹氏が目の前におられるのである(写真２)。早速曹氏は自分の部屋に通して下さり、筆者が「毛猴」ばかりに目を輝かせていると、曹氏は息子に気配りされ、色々話しかけておられた。曹氏と話をしているなかで、自分は中国5,000年７大小説の一つ「紅桜夢」の原作者曹雪芹の子孫でもあるといわれた。話によると、曹雪芹氏は曹家の14代で、自分は19代であるとの話である。曹氏はまた美術界でも高い評価を受けておられ、理事や委員など種々の要職に就いておられる。また最近、栄誉賞も受けられたという(写真３)。多くの「毛猴」を見せて戴きながら数点譲って戴いた。大変民俗的価値の高いものである。譲って戴いたものは、

①毛主席の時代の林・副主席をモデルにしたもの
②三国志をモデルとしたもの
③猿回しをモデルとしたもの
④食後のくつろぎをモデルとしたもの
⑤喧嘩をしているところ(写真４)

を巧みにコブシの芽で猿の胴体部分を、蝉の抜け殻の肢部分で猿の手足を製作されているのである。いずれにしても、壊してはならない芸術品なので、早速ホテルへ帰り保管することとした。暫く休憩後、息子の目的であるハードロックカフェにタクシーにて乗り継いでいく。有名ブランドらしく10枚あまりＴシャツを購入していた。筆者も１枚ついでに購入した。その後、その付近にある大型店舗燕沙友誼商場でショッピングを楽しむことにした。ここでは特大のチョウの剪画を発見購入すると共に七宝焼の昆虫ブローチなどを手にいれることができた。今度はタクシーにて骨董や玩具で有名な古玩城へいったが、残念ながら春節の２日目ということでお休みであった。しかし、そのまわりに骨董品を並べた市がたっており、物色したところセミの玉があったがだまされそうで迷ったあげく買わなかった。そこで、この日の予定は終了という感じであった。古玩城から今度はタクシーがなかなか拾われなかった。時間待ちし、何とか乗車、北京の繁華街経由でホテルへ戻ろうとした。途中、王府井通りにより北京工芸美術へ中国工芸品を手にいれるべく寄ったのだが、そのビルは解

体されていた。今度は近くの大きな百貨店を覗くと大きなチョウ凧が吊してあるのが目につき平面的に大きなチョウ凧を購入した。残念ながら立体的なチョウ凧は持ち帰るのが大変だからである。ホテルへ帰ると夕食は無事「毛猴」が手に入ったので、ホテルのレストランで独特の民俗楽器を聴きながら広東料理で乾盃がてらの夕食と相なった。

第３日目(1997. Ⅱ. 10)

今日はショッピングが無事終了したということで観光に力を入れることにした。というのも「毛猴」入手に協力して下さったＪＴＢデスクの女性の顔を立て、オプショナルツアーに参加したのであった。先ず中国青年旅遊社のＫ社から案内を受け、マイクロバスに乗車。１番最初に天安門で記念撮影後、故宮博物院で故宮の文物を見学した。靴の底が擦れて床の傷みを防ぐため各自面白いスリッパをはかされた。故宮はその文物より建築物そのものが博物資料と数の多さにびっくりし、大変すばらしかった。台湾の故宮とは一味違う展示方法でもあり言葉では言い表しようがない。故宮見学は程々に早速土産物屋へ連れていかれた。いつも思うことだが全く旅行の案内人というのは土産物屋に連れていく機会が多い。バックマージンをねらってのことだろう。お昼になったところで故宮を離れ次は万里の長城へいった。同じツアーの中には１人で参加している若い男性や夫婦、ギャルたちも数多くいた。万里の長城につくと寒さで全く震えあがった。息子は毛皮の帽子を無理矢理100元で買わされそうになったが、プヤオ(不要)の連発で60元(約1,000円)にまで値が下がり結果的に安い買い物をしたようだ。グループでは年齢的に筆者が一番年上であったのだが、日頃の訓練？が実を結んだのか万里の長城の坂道を一番早く歩き、目的地の展望台についた。そこからの景色は最高であったが、帰ってみたらカメラのボケで満足に写っていなかったことは残念であった。筆者は中国の桂林、万里の長城そして蘇州だけは死ぬまでに一度は生きたいところと思っていた場所である。案外早く目的を果たしてしまったので次の目標を作らねばならなくなってきた。万里の長城の観光を終え、またまた定番の土産物屋へ連れていかれた。ここでは少しだけ景泰藍(七宝焼)のチョウ工芸品を購入した。本当にどこの土産物店でも「毛猴」のような民間工芸品はなく、民間工芸品と名の付くものは剪画があるぐらいでまず見あたらない。ホテルへ帰ってから再々度、友誼商店へ出掛けいよいよ買い残しの大型土産「龍頭ムカデ凧」を大、中、小３点購入した。特に大のムカデ凧は大きく頭部と胴部が２箱に入り調度空きがあるので前日分けて戴いた「毛猴」を入れるのに良い梱包用の箱となったのでうまく荷造りして荷物を小さくした。何とかショッピングの旅行も無事終わり明日の帰国を待つだけとなり寝床に入った。

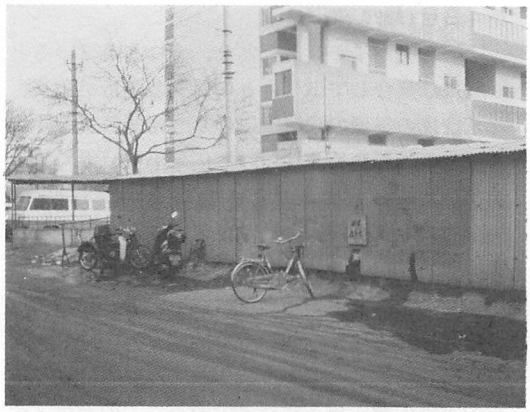
第４日目(1997. Ⅱ. 11)

ホテルでバイキングをとり、くつろいでいると９時には集合してほしいとの係員の連絡があり、北京空港の昼便の飛行機にのり一路関西空港へ到着、その後関空特急「はるか」に乗車後、新幹線に乗り換え姫路へと帰ってきた。

今回の北京訪問により魚虫市場は残念ながら空振りであったが、現地中国でも手に入りにくい「毛猴」が入手でき目的をはたした。尚、「毛猴」作者の曹氏はかなりの高齢で最近はあまり「毛猴」の製作はされていないようである。筆者も分けて戴くのが気の毒に思ったほどである。この紀行文を読んで買い求めに行くことは先方にとって大変迷惑がかかることになると思われるので、くれぐれも自粛願いたい。訪北京の際、ホテルに於いて春節特別番組で、青年の「毛猴」作者がテレビにおいて紹介されていたので、この民間工芸品が廃絶することはないと思われる。また曹氏より日本から訪れた方々の名刺を拝見させて戴いたが、民族、民俗、玩具、教育関係の諸先生方が多く、昆虫関係の方は全くおられなかった。また近日中に北京を訪問し、北京での鳴く虫資料の入手に努めたい。

今回の北京旅行で「毛猴」の入手にご協力願った日本玩具博物館長井上重義館長、同学芸員尾崎織女氏に御礼申し上げます。

心想事成

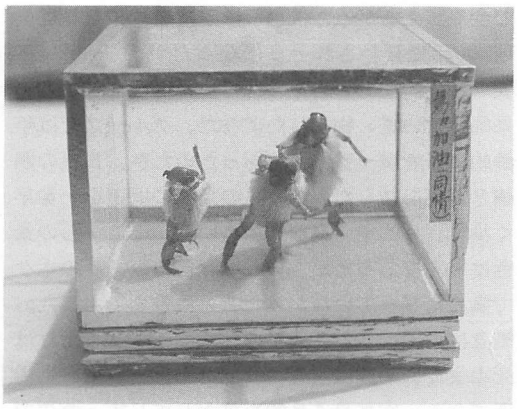


①

②

榮譽證書
IN RECOGNITION OF YOUR OUTSTANDING ACHIEVEMENTS IN
THE PRESERVATION, TRANSMISSION AND SPREAD OF FOLKLORE CULTURE, WE
CONFER ON YOU THE TITLE OF MASTER OF INDUSTRIAL FOLK ART

③



④